

## 2021年度 第二回 外国人児童生徒教育推進協議会報告

国際学部教授 田巻 松雄

2022年1月20日（木）、今年度2回目の外国人児童生徒教育推進協議会（栃木県教育委員会、9市2町教育委員会・小中学校代表校長）を開催した。宇都宮市東生涯学習センターで開催予定であったが、コロナ感染拡大を受けて、急遽オンラインでの開催となった。

まず、田巻が、国際学部附属多文化公共圏センター事業としてのHANDSの今後について報告した。大学は、法人化以降、6年ごとの中期計画中期目標を策定して教育、研究などに取り組んでいる。今年度は第三期中期目標中期計画の最終年度に当たり、次年度から4期目（2022年度～2027年度）に入る。国際学部は第四期の目標計画を策定するに当たり、今後もHANDSを展開していくことを決めた。次の6年をどのようなHANDSにしていくのか、新たな挑戦のつもりで関係者一同向きあっていきたい。なお、2020年8月に刊行した『宇都宮大学HANDS10年史—外国人児童生徒教育支援の実践』は、宇都宮大学の機関リポジトリへ登録されたので、電子ファイルとして公開されていることを伝えておきたい。

次に、田巻が今年度の活動報告を行った。このなかで、まだHANDSの直接の事業ではない

が、センターが「とちぎ自主夜間中学」（田巻が代表を務める「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」が2021年8月に開校）との協力連携を図っていくことを決めたことを報告するとともに「とちぎ自主夜間中学」の活動の様子を紹介した。とちぎ自主夜間中学宇都宮校は毎週日曜日夜間に学習活動を行っているが、年齢も国籍も多様な約40名の学習者が学びに来ている。特筆すべきは、学齢超過の外国人が学びに来ていることで、かれらは皆この春に高校受検を予定しているが、学齢を超過しているために現在どこの中学校にも在籍していない。このため、受験資格の確認や出願書類の準備等は、すべて自分自身で行わなければならない。かれらは、中学校に在籍している外国人生徒に比べて、高校受検でより厳しい状況に置かれていると言える。今後は、学齢超過者へも視野を広げたい。

特集的なテーマは2つで、1つは、今年度の「多言語による高校進学ガイダンス」を関係者で振り返った。今年度県内では、下野新聞社主催の高等学校進学フェアは中止となったが、HANDS主催のオンラインガイダンスのほか、栃木市、小山市、真岡市、佐野市の4会場でガイダンスが実施された。ガイダンスの地域開催はガイダ

ンス参加者に「ローカルな情報」を提供できる点で重要性が高いことが確認された。ガイダンスのより有効な実施体制について、今後も本協議会で活発に議論していきたい。もう1つは、各地域各現場での状況報告と意見交換である。9月開催時からの様々な変化も報告され、外国人児童生徒問題の多様化、複雑化が共有された。このほか、若林センター研究員から、だいじょ

うぶNet、多言語連絡帳、ガイダンス主催者交流会(1月23日開催予定)について報告があった。

「ガイダンス主催者交流会報告」(11頁)でも触れたが、県内各地域の関係者が定期的に話し合う本協議会は、全国的にみても本県に特有な非常に貴重な場となっている。本協議会から外国人児童生徒を応援するためのアイデアやメッセージを発していきたい。

---



---

## 「多言語による高校進学ガイダンス」 2度目のオンライン多言語による高校進学ガイダンス

---

多文化公共圏センターコーディネーター

鄭 安 君

2021年度多言語による高校進学ガイダンスは対面3回およびオンライン1回と合計4回の開催を予定していた。しかし、新型コロナウイルスの「第5波」感染再拡大で、栃木県における緊急事態宣言が再発令され、下野新聞社主催の栃木県高等学校進学フェアが中止となった。それにジョイントする形で行う佐野市および宇都

宮市での2回の対面ガイダンスも断念せざるを得なかった。結果、今年度の多言語による高校進学ガイダンスは本センターが主催する9月20日のオンラインガイダンスおよび10月2日の栃木市教育委員会と共催の形で行う対面ガイダンスの2回のみとなった。

2021年多言語による高校進学ガイダンスの開催予定と実施状況

	ガイダンス名称	開催団体等	日時・会場	参加者	対応言語(通訳)
1	栃木県高等学校進学フェア2021(多言語による高校進学ガイダンス)	下野新聞社主催への参加	9/12(日) 佐野市文化会館 (佐野会場)	- (緊急事態宣言の再発令で中止)	
2	オンライン多言語による高校進学ガイダンス	宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター	9/20(月) オンライン開催 (ZOOM)	12家族と 2名の教員 (見学)	ベトナム語、中国語、 フィリピン語(タガログ)、 スペイン語、ポルトガル語
3	栃木県高等学校進学フェア2021(多言語による高校進学ガイダンス)	下野新聞社主催への参加	9/23(木) マロニエプラザ (宇都宮会場)	- (緊急事態宣言の再発令で中止)	
4	令和3年 多言語による進学・学校生活ガイダンス	栃木市教育委員会と共催	10/2(土) キョウトウとちぎ蔵の街楽習館	6家族 (14名)	スペイン語、ウルドゥー語、 ネパール語

本報告は本センターが主催する2度目となるオンラインガイダンス（9月20日）の取り組みと様子を中心にまとめるが、栃木市教育員会と共催した10月2日の対面ガイダンスについては、センターからHANDS事業関係者2名を説明担当として派遣した。また、真岡市教育委員会の協力依頼により、11月28日の「真岡市多言語による進学ガイダンス」にもシンハラ語を母語とするスリランカ人大学院生を通訳として派遣した。

オンラインガイダンスの開催に向けて、昨年は言語ごとにZOOMミーティングを準備したが、今年はすべての言語を1つのZOOMミーティングに集約した。ガイダンスは午前の部（10：00～13：00）と午後の部（14：00～17：00）の2回に分けて実施し、全体説明をしたあと、ブレイクアウトルーム機能を利用して各言語に分けて進行した。状況に応じて迅速に対応できるように、パソコンとZOOM機能に明るい学生を「技術担当者」として配置し、ガイダンス統括者の判断と指示に沿い、オンライン上に各ルームへの人員移動を行った。

1つのZOOMミーティングの集約使用したことで、ZOOMホストおよび共同ホストは遠隔でありながら必要に応じて、各言語のルームに入ることができ、全体の様子を伺うことができた。遅れて参加した家族への対応もしやすくなった。そして、説明担当者と通訳担当者が異なるルームに臨機応変に移動して相談に対応することができた。

今年度のガイダンスで強く感じたことは3つある。1つ目は、参加者が昨年よりもスムーズにオンライン参加ができていることである。申し込んだ13家族のうち、急用で不参加となった1家族を除いて、12家族は予定通りに参加した。2つ目は、生徒と保護者が揃ってカメラの前に出るケースが増え、親子で高校進学について話し

合いながら、質問していたことが多かったことである。3つ目は、学校の先生も見学者としてオンラインガイダンスに参加したことである。

多言語による高校進学ガイダンスは、言語のハンディキャップを持ちやすい保護者に高校進学の情報を提供し、親子と一緒に高校進学について話し合える機会を増やす願いも込めている。親子がともにガイダンスに参加して、話し合いながら質問することが増えることは、大変うれしいことである。そして、休日にも関わらず、学校の先生が自ら申し込んで参加されたことは、物理的な移動が必要のないオンライン開催ならではの参加しやすさがあるほか、外国ルーツの生徒たちに対する先生たちの高い関心と熱意に心が打たれる。

「HANDS」は、様々な立場の関係者が手と手を取り合って、ともに歩んでいくとの意味合いを込めたネーミングである。生徒・保護者・先生の三者がともにガイダンスに参加したことで、HANDS事業が描いている将来が一層近づいてきたと感じる。コロナ禍はしばらく続く可能性が高いなか、2度のオンライン開催で得た経験を活かし、来年はより良い形で対面とオンラインの両方の開催を目指したい。



9月20日オンライン多言語による  
高校進学ガイダンス開催前の準備風景

---

---

## 「多言語による高校進学ガイダンス」

# 共に学ぶ場となる多言語進学ガイダンス

---

国際学部3年

セキブンカン

2021年度の多言語進学ガイダンスは様々な方の協力をいただいて、無事に成功した。この活動は県内の外国人児童生徒として高校進学の情報を手に入れる大切の場だと思う。特に外国人児童生徒及びその保護者たちは日本語があまりできない方も少なくない。外国人児童生徒に必要な進学情報をどこから手に入れるかが分からないし、手に入れても日本語が分からないためうまく理解できないこともある。その問題を解決するために、多言語進学ガイダンスでは外国人に向けるやさしい日本語だけではなく、ポルトガル語・スペイン語・英語・フィリピン語・中国語・ベトナム語、タイ語で高校受験の制度を説明し、生徒さん一人一人の質問を丁寧に答えるように行った。

ガイダンスを進める中で感じたのはやはり高校進学の方法が非常に複雑で、例えば、公立高校の一般選抜、特色選抜、A特別選抜検査、B特別措置による学力検査、私立の推薦入試、単願併願制度、定時制高校など外国人に十分に理解してもらうために母語で説明するしかないものが沢山ある。多言語進学ガイダンスのおかげで、高校進学に悩まされる外国人児童生徒が自分の状況に相応しい進学方法を選んで、効率的に高校受験を準備できると思う。また、学生である私としては、外国人児童生徒が進学に関する悩みや、県内の進学制度を勉強できた。だから、生徒と保護者のみならず、支援者及び外国人児童生徒問題に興味を持っている方に対して、こ

のガイダンスは非常に良い学びが出来る場であると考えている。

実際コロナウイルス感染拡大の状況で進学ガイダンスを開催するのが決して容易ではない。今回は前年度と同じくオンラインツール ZOOM を活用してガイダンスを進行した。ただし、今回は前回のように違う国ごとで ZOOM の部屋を開くのではなく、一つの ZOOM の部屋でブレイクアウトルーム機能を活用して、生徒、保護者と支援者を該当するルームに移動させ、必要に応じてセンターから各ルームのメンバーを移動させることができるようになった。また、ガイダンス当日で Wi-Fi を繋げない問題もあって、先生と学生の協力で開催直前に解決したが、今後ガイダンスを準備する際にネット環境をよく確認する必要があると言える。生徒及び保護者が ZOOM に入る際に、名前の変更やブレイクアウトルームの入り方など必要な情報を事前に画面で共有すれば、ガイダンスをもっと円滑に進めると思う。

元外国人児童生徒である私は、この多言語進学ガイダンスは進学に悩まされる生徒たちにとって非常に貴重な情報収集の機会であることを強く感じている。自分が日本の中学校に通っていた時にはこのようなガイダンスがなかったため進学情報の収集やそれを理解するのが非常に困難であった。今後も多言語進学ガイダンスをぜひやり続けて、高校進学を目指す外国人児童生徒を助けていただければと思う。

## ○君の学習支援～青空を見上げて～



国際学部 4年 遅 宸 琳

ふと顔を上げて青い空を見たとき、地球上の他の場所でも同じ景色が見られるのではないかと思わずにはいられなかった。でも、同じ風景の中、同じじゃないストーリーがある。私たちが共通して信じている一つの物語りが文化だと考えるのであれば、この物語をどのように理解すべきだろう。一つ確かなことが、違う物語の間を行き来することは簡単ではない。

2021年後学期に、私は旭中学校の中国人学生、Oくんをサポートし始めた。他のHANDSボランティアとの会話で、彼が学業成績と学習状態に直面した困難について分かった。クラスで寝たり、宿題をしなかったりし、試験で0点を取ることもよくあるとのことだった。また、彼がお母さんと日本に来てから1年足らずとのことも知った。そして、この日本での短い中学生の生活も、来年の高校入試で終わりに近づいている。15歳の彼にとって、環境も心境も大きく変化した一年になるだろう。

彼の作文を読んだら、日本語が分からなくてクラスに溶け込むことができないことや、学校の給食に慣れないなどのことも分かった。簡単な日本語しか使われていないで書かれている文字に潜む15歳の彼の辛さと不安を感じた。しかし、クラスで中国語のできるクラスメートと友達になったことや、学校の日本語教室と文化交流センターの先生たちへの感謝の気持ちもきちんと書いた。

日常生活を見て、やはりクラスメートの中に、互いの気持ちの理解がうまくいかなかった子も

いる。サッカーなどする時、他の学生と衝突し倒れたことがあったが、サッカーやバスケが嫌になることはなかった。冬になって寒くなり、彼は母親に手袋を買った。こういった母親への思いやりも忘れられない。学習支援で彼と出会ったが、その生活中的な責任感と優しさに励まされた心の中で思った。

とちぎ自主夜間中学の年末交流会では、彼が学習者の中の最初の発表者だったが、うまくできた。学習においても、彼が成長を見せてくれた。学校の授業で、支援開始時に日本語がわからないから眠りにつくことが多かったが、今になって家で積極的に勉強する姿が見えるようになったことが彼の母親から分かった。自分も周りの皆も、進学先について心配したが、高校に進学できた結果を聞いて、感動した。

今期の短い支援活動によって自分の力不足を深く感じた。クラスでの学習サポートに関しては、先生たちの日本語を中国語に通訳するだけではなく、共同学習の姿勢で教室で授業を聞くことが大事だと思う。自分は再び中学生の同級生の目線でOくんの辛抱を見て、共感できることが多くあった。今回の支援活動で、Oくんの努力と向上心を見て感銘を受けた。

Oくんと共に高校入試をという特別な時期を再び体験し、支援活動を改めて理解することができた。一緒になって、問題解決する魅力を深く感じた。今後もぜひHANDSの支援活動に参加したい。



## 学習支援を通して感じたこと



大学院地域創生科学研究科1年

アギーレ ナルミ

昨年（2021年）の10月から、真岡市内の小学校で学習支援を始めました。担当している児童は、ペルーにルーツをもつ小学校1年生のAさんです。Aさんは、ほとんど日本語がわかりません。そのため、学習支援は主にスペイン語を使用し、校内の日本語教室に移動して実施しています。

支援内容は、2つに分けられます。1つは、教科学習の支援です。授業で解いたプリントやテストのやり直しを中心に行い、教科は、主に国語と算数です。国語では、漢字の読み方や書き方を一緒に復習します。算数は、問題文をスペイン語で説明することに加え、絵や道具を使って説明するなど、問題文や解答への理解に、少しでも近づけるための工夫に努めています。

2つ目は、日本語指導です。日本語指導は、野菜や果物、動物などの絵カードを使用して、日本語のことばを増やすサポートをしています。Aさんは特に、この絵カードを使う日本語の勉強を楽しんでいるようで、嬉しそうに絵カードを取りに行く姿がとても微笑ましいです。また、覚えたことばを身近で見つけると、嬉しそうに「つくえ！いす！」と私に伝えようとする場面はとても印象的です。

Aさんの楽しんでいる場面は、同時に私が安心する場面でもあります。このように感じるのは、通常学級ではとてもおとなしいからです。周りに、自分のことばで会話できる人がいないからかもしれません。しかし、日本語教室

に来ると、たくさんの笑顔を見せてくれます。家で飼っている犬の話やお母さんに買った洋服の話、図書室で借りた本の話など、たくさんのお話をしてくれます。そのような、ありのままのAさんを見ると、日本語教室がAさんの居場所の1つになっているのではないかと感じます。現時点では、日本語で会話することは難しいですが、少しでも学校に通う楽しみをもってもらいたい、日本語教室がそういった場所であってほしい、そんな思いを大切にしながらAさんに接しています。日本語を覚えることももちろん重要ですが、Aさんが使える言語で様々な体験や感情を表現することも重要だと思ひ、今はスペイン語でのコミュニケーションも大切にしています。

また、Aさんの学習支援を通して、先生方のサポートも非常に印象的です。それは、Aさんの担任の先生や日本語教室の先生方が、スペイン語の辞書を方手に、あるいは覚えたスペイン語でAさんに接している光景です。Aさんだけが日本語の勉強に尽力するのではなく、先生方も一丸となってAさんに向き合う姿からは、お互いに歩み寄ることの大切さを実感させてくれます。

毎回試行錯誤をしながらの学習支援ですが、学校に通う楽しさを少しでも感じてくれるように、この活動を継続することで貢献できればと考えています。

## 学生ボランティア感想

# 学生ボランティアを受け入れて



宇都宮市立旭中学校日本語指導教室担当

船山 千恵

本校は、外国人児童生徒教育拠点校に指定されています。現在、中国、ペルー、フィリピン、ネパールにつながりのある8名の生徒が通級しています。8名のうち、3年生は5名です。

その5名の中でも、中2の秋から来日したOさんは、支援がより必要な状況であったため、学生ボランティアの派遣を依頼し、昨年度から荘敏霖さんに来ていただきました。進路を見据え、3年生になった今年度からは張蒙さん、遲宸琳さん、李文暢さんにも協力をいただきました。合わせて4名の学生さんたちに、5教科を中心に2時間ずつ入り込み支援をしていただきました。

学生さんたちは、それぞれの論文執筆など、学業や就職活動で多忙の中、スケジュールを調整しながらOさんのために熱意をもって支援してくれました。一斉授業の中で、学習を理解す

るには難しい状況であったOさんは、「今日、学生ボランティアさんは来ますか?」と、学生さんたちの来校を毎回楽しみにしていました。学生さんたちによる母語支援により、Oさんは安心して授業を受けることができました。

また、学生さんたちは、単に受験に向けて教科学習を支援するだけでなく、日本語でうまく自分の気持ちを伝えることのできないOさんの悩みを聴き、中国と日本の学校生活上の違いなどをOさんに伝えてくれました。

弟を思う姉や兄のような優しさの中にも、「授業中は集中する」、「やるべきことは自覚をもってやる」などと、熱心で真摯な姿勢でOさんに向き合ってくれた学生ボランティアの皆さんには、本当に感謝しています。ありがとうございました。

## 学生ボランティア感想

# ボランティアの方へ 感謝をこめて



真岡市立真岡小学校日本語教室主任

菅谷 真由美

本校は、外国籍の児童が各クラスに2~3人と、比較的外国人の多い小学校です。ただ、入学前に幼稚園や保育所に通っている児童が多く、日本語教室での個別指導は必要ですが、自教室で他の児童と一緒に活動できる子がほとんどです。

しかし、昨年7月に、全く日本語の分からないI君が、編入してきました。日本語が通じただけでなく、集団生活をするのが初めてというI君。本校には日本語指導助手の先生が来

てくださっていますが、翻訳文書作成や保護者の対応などもしていただいているので、彼への支援の時間が十分取れません。そこで、学生ボランティアの方の派遣事業に申し込みました。

すぐに対応していただき、夏休み明けから現在まで、お二人の方が、ご自分の授業の合間に来てくださっています。国語や算数の時間には、個別指導をお願いしています。1年生の教室では、担任の先生の話伝えるだけでなく、体育や図

工等の学習の補助もしてくださっています。図工が終わった後、空き箱で作ったペンギンを見せてくれたときのI君の笑顔は、とても印象に残っています。本校に来て6か月のI君。今ではひらがなの読み書きができるようになり、漢

字にも興味をもち始めました。学校生活に慣れてきて、明るい表情で生活しています。学生ボランティアの方への感謝の気持ちでいっぱいです。これからもよろしく願いいたします。

## 令和3年度 子ども国際理解サマースクール報告

### 内なる国際化

国際学部 3年

下村 由紀那

私は今回、イベントの司会と第一部の「日本の中の外国」というテーマで、日本にどのくらいの外国人が住んでいて、どこの国から来ている人が多いのか、また栃木県内ではどのくらいの外国人児童生徒がいるのかなどをクイズ形式にしなが、身近に「外国」「国際」があるということをお話させていただきました。クイズを進行していく中で、子どもたちに「なぜその回答を選んだのか」聞いて回っていました。「なんとなく選んだ」という答えがほとんどでしたが、中には「テレビや授業で聞いたことがある」、「外国に興味があるから知っている」、「KPOPが好

きだからコリアタウンは知っている」など、私の予想よりはるかに外国に興味を持っている子どもたちが多かったことが驚きでした。休憩時間に子どもたちに「同じクラスや学校に、どのくらい外国にルーツを持ったお友達いるの?」と聞いて回ったところ、ほとんどの子どもたちが「1～3人はいる」と回答していて、改めて栃木県内の外国人児童生徒の多さと、これが「外国」を身近に感じる理由の一つだと知りました。(初出:『令和3年度子ども国際理解サマースクール記録誌』)

### より広い世界へ

大学院地域創生科学研究科 2年

崔 敬 恩

今回韓国の紹介を担当しました崔敬恩です。私は韓国から来た宇都宮大学院の学生でありながら、二人の子供の母親です。サマースクールの参加者が自分の子供と同じ小学校4～6年生という話を聞いて、単純に韓国を知って終わるのではなく、これを始めに楽しい!もっと知りたい!に繋がるきっかけになって欲しい気持ちを込めて紹介内容を構成しました。自分の経験から見ると、海外で自分を紹介するには、相手に自分の国について教える必要が多くありましたので、日本を意識しながら私からの韓国紹介を理解するよ

うに、韓国と日本を比較紹介しました。日本の多文化を身近に理解できるように日本にいる外国人(私や私の家族)も自己紹介を通して取り組みました。韓国の同級生の話をしたり、韓国人のお友達に使えるような韓国語の挨拶練習もしました。最後の質問コーナーには子どもたちから予想よりも多く質問があつてとても嬉しかったです。これからも子供たちにより広い世界への多様な関心が芽生えることを期待します。

(初出:『令和3年度子ども国際理解サマースクール記録誌』)



## 勉強になった2つのボランティア活動

国際学部1年

清本 まゆみ

私にとっての2021年度は多くの出会いと成長の一年になりました。

私は昨年の4月に宇都宮大学に入学し、希望と期待で胸がいっぱいでした。しかし、高校とは全く異なる環境や人間関係の新しい生活に慣れるのが大変で、時には進学した事が間違いだったのではないかとも思いました。そんな時、宇都宮大学国際学部附属多文化公共センターが行っている学生ボランティア活動や田巻松雄先生が自ら立ち上げた「とちぎ自主夜間中学」に出会いました。最初は、仕事や業務を淡々とこなす上級生を前に自分が役立てる事は無いのではないかと思いましたが、先輩方と先生方は私を優しく指導してくれました。そして、活動をしていく中で自分も人の役に立てる事に気付きました。

この一年で行ったボランティア活動の中でも、印象に残りとても勉強になったボランティア活動が二つありました。

一つ目は、宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターが行っている学生ボランティア活動です。学生ボランティア活動では、県内の小学校に通っている外国人児童生徒を週に一時間だけサポートしました。私はこの活動を通して、論理と実践の違いを学びました。大学の講義や本などを通してボランティア活動や多文化共生の課題について学んだと思っていましたが、小学校でのボランティア活動を通して自分の知識

不足を感じました。実際の現場で活動する事で自身の問題点や偏見に気付く事と共にどのようにその欠点を改善できるかについても考えるようになりました。

二つ目は、田巻先生が行っている「とちぎ自主夜間中学」のボランティア活動です。とちぎ自主夜間中学の活動を通して、中学校入学を拒否された外国人児童生徒の中学校入学を認めてもらえるように努めた田巻先生の通訳としてサポートしました。私はこの活動で、通訳の難しさを実感しました。私は母語と同じくらいに日本語を流暢に話せるので、いつも日本語が話せない家族や親戚の方に簡単な通訳をしています。しかし、今回私が通訳をさせて頂いた外国人児童生徒は来日して間もない為、日本の知識があまり無く母語で伝えても理解してもらえない事がありました。また、日本でしか存在しない言葉を通訳するのが大変でした。この活動を通して、通訳をする時は当たり前を当たり前だとは思わず、相手が理解できる言葉に変えて伝える事が大切という事を学ぶことが出来ました。

2021年度はこれらの活動を通して、大学の講義だけでは学べない事を多く学び、多くの人に出会う事が出来た一年となりました。これらの経験から学んだ事を忘れずに2022年も様々な活動に参加し、より多くの知識と経験を得たいです。

## 教育を受ける権利

国際学部2年 黒澤 実奈

私がとちぎ自主夜間中学にパートナーとして関わらせていただいてから、およそ3か月経ちました。参加を決める前は色々悩んで、初回の授業まで落ち着かない気持ちでした。今ではこの夜間中学に関われてとてもうれしく思っています。

私は大学で教員免許の取得を目指しています。様々な教職の授業を取る中で、とある先生が「今、教育の自由がどんどん減っている」とおっしゃっていました。「定時制や夜間学校に行く人は、本当に学びたい人。一般の学生より熱意を持って勉強する」。その言葉に背中を押されて参加を決めたのですが、今思うと本当にその通りだと思います。

私は現在フィリピン人の17歳の女の子の高校進学を応援しています。彼女と初めて会ったのは11月のことでした。まだ来日して6か月弱なのに、日本語で会話が続くことに驚きました。後々知ったことですが、フィリピンの中学校にいたとき、かなり成績優秀だったそうです。3か月経った今では、文章も会話もはるかに上達しました。会って間もないころは、私からたくさん質問をしてなるべく会話を続けようと工夫していたのですが、今では彼女の方から話題を振ってくれ、友達のような会話を交わしています。

もともと勉強が得意だということもあるかと思いますが、何より彼女には熱意があります。彼女だけでなく、このとちぎ自主夜間中学に参加している学習者の方々はもちろん、パートナーの方々も全員熱意を持っています。そんな彼女は3月に高校入試を控えています。彼女はデザイナーを目指しています。専門的な知識が必要な職業なので、大学に行く必要があります。彼女ならどこにいても努力を怠らずに進学を目指すはずです。しかし、今彼女はどこの学校にも通っていません。私たちが進学の際に受けてきた学校からの支援が何もないのです。外国籍というだけで受験するのも許可が必要だったり、校長の裁量で試験内容が決まったりなど色々な困難があることに、とちぎ自主夜間中学に参加して初めて知りました。

教育を受ける権利は、すべての人が等しく持つ権利のはずです。教育はその人の今後の人生、さらには社会全体を変えてしまうほどの力を持っています。その力の根源は、熱意です。熱意は、学びたいという気持ちが生み出すものです。教育を受ける権利をすべての人が行使できるような社会になってほしいと思います。私も色々なことを学びつつ、できる限りの支援をしていこうと思います。

# 「第21回 高校進学・進路ガイダンス 主催者交流会 in 千葉」開催報告

国際学部教授 田巻 松雄

2022年1月23日（日）午後に「第21回 高校進学・進路ガイダンス主催者交流会 in 千葉」がオンライン会議で開催された。表題からも伝わってくるように、関東を中心とする様々な地域で高校進学・進路ガイダンスに関わっている関係者間の年に一度の情報・意見交換と交流の場である。今回が21回目なので、2001年から開催されてきたことになる。2018年1月には宇都宮大学で開催されている。自分は宇大開催を含め数回しか参加していないが、今回は「行政との連携」をテーマとするパネルディスカッションに登壇することとなり、最初から最後まで参加した。

まず、茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・神奈川・静岡・山梨・長野の9県と東京都から今年度実施した（あるいはコロナ禍の影響で実施できなかった）ガイダンスについての報告があった（報告時間各4分）。簡潔にまとめると、ガイダンスは、主に日本語を母語としない外国人生徒と保護者等を対象とするもので、高校入試や日本の教育制度などについての重要な情報を正確に分かりやすく伝えることを目的とする点は共通するが、主催者や内容、スタイルは地域ごとに大きく異なっている。次に、主催地域の千葉県から、「千葉県立生浜高校からの報告」と「フリースタールのアフガニスタン人生徒たち」と題する報告があった（15分×2）。パネルディスカッションは「行政との連携」をテーマとして、自分のほ

かに千葉と茨城の関係者が登壇した（40分）。全体会は以上で終了し、その後、希望者が分散会（40分）と自由意見交換会（20分）に参加した。

「行政との連携」では、主に教育委員会との連携が話題で、どうすれば教育委員会を効果的に動かすことが出来るかに関心が集まったと言える。なかなか効果的に動かすことが出来ない現状が背景にある。茨城では「円卓会議」、千葉では「要望」がキーワードであった。自分はHANDSの全体的な性格を述べたうえで「協議会」を軸に話した。大学が主催者となり、県内全域の自治体と定期的な情報・意見交換を行っている協議会のような組織は他地域にはないこともあり、結構大きな関心を向けられたように感じた。6名前後がルームに分かれた分散会では、八王子在住の方から、八王子には約20もの大学があるが、どうやったらガイダンスに協力してもらえるかとの質問が向けられた。もちろん、これだ！という回答は出せなかった。また、国際学部の外国人生徒入試によって入学した学生たちの様子も聞かれた。

次年度は栃木開催が確定した。様々な地域で実施されているガイダンスの多様な在り方に触れることで、課題を見つめ改善策を考える大きなヒントが得られるだろう。次回の交流会では栃木関係者が一人でも多く参加出来るような準備をしていきたいと思っている。

## 事務局だより

### 令和3年度活動

1. 外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣（通年）
2. 外国人教育相談（栃木県国際交流協会）：月 1 回（新型コロナウイルスの影響でオンラインや電話で随時対応）
3. 授業科目「グローバル・イシュー研究演習Ⅱ」開講（前期・後期）
4. 「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」および「とちぎ自主夜間中学」への協力：  
3月7日 「とちぎに夜間中学をつくり育てる会」発足  
6月6日 夜間中学ドキュメンタリー映画上映会（小山市）  
6月26日 夜間中学ドキュメンタリー映画上映会（宇都宮市）  
7月4日、7月11日、7月18日、7月25日 入学説明会  
8月8日 「とちぎ自主夜間中学」開校式・入学式  
10月～ 「とちぎ自主夜間中学」開講（宇都宮校：月 4 回、小山校：月 1 回）
5. 子ども国際理解サマースクール（宇都宮市東生涯学習センターとの協働）：8月3日
6. 外国人児童生徒教育推進協議会（栃木県教育委員会 後援）：  
第 1 回 2021年9月16日（宇都宮市東生涯学習センターおよびオンライン開催）  
第 2 回 2022年1月20日（オンライン開催）
7. 多言語による高校進学ガイダンス：  
9月20日 オンライン開催  
10月2日 キョウトウトちぎ蔵の街楽習館（栃木市教育委員会と共催）  
\*そのほか、多言語資料の提供、11月28日（日）真岡市教育委員会主催「外国人の親子向け高校進学ガイダンス」にシンハラ語通訳 1 名（本学大学院学生）派遣
8. ニュースレター『HANDSnext』第 27 号の刊行：3月中旬
9. 栃木県における外国人生徒の進路状況調査：2月～3月  
\*9月12日（佐野市文化会館）および9月23日（宇都宮マロニエプラザ）多言語による進学ガイダンス（多文化公共圏センター主催・下野新聞進学フェアへの参加）、真岡市 AMAUTA 外国人児童生徒支援、真岡市国際交流協会「イヤー・エンド・パーティ」などが新型コロナウイルスの影響で中止。  
\*小山市外国につながる子どもの学習支援学びの教室「かけはし」のための学生ボランティア集団派遣（10月2日、10月16日、12月18日、1月15日、1月29日、2月26日、3月5日の全7回の予定。10月～2月は新型コロナウイルスの影響で中止、3月は小山市職員で対応）

## HANDS next とちぎ多文化共生教育通信 第27号

2022年3月4日発行

発行：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDS事業

（代表：田巻松雄）

事務局：〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（担当 鄭安君）

TEL 028 (649) 5196 FAX 028 (649) 5228 E-mail ankun@cc.utsunomiya-u.ac.jp

印刷：鈴木印刷株式会社 〒321-0901 栃木県宇都宮市平出町3751-11